

# 兵衛志殿御返事

安元年五月 五七歳

御ふみにかゝれて候上、大式の阿あ閨ぎの梨りのかたり候は、ぜに十連余れん並びにやうやうの物ども候ひしかども、たうじは農の時うどきにて 人もひきたらぬよし も及び候はざりけ 兵衛志殿の御との 御夫馬ふまにても て候よし申候。

夫百それ濟国より日本国に仏法のわたり候ひしは、大船定にのせて此をわたす。今のよど河より近あ江をみの水海につけて候ものは、車運にて洛陽へははこび候。それがごとく、たといかまくら鎌に倉いかなる物を人ふにたびて候とも、夫と馬日となくばいかでか が命はたすかり候べき。昔昔徳勝 童子は土の餅を仏に 阿育大王と くやう

しまいらせ候ひしゆへに、阿育大王の第一らの大だい臣きち羅提吉となりて一閻浮提後の御うしろめ、所謂大を臣をい殿の御時のごんのたいふどの権大夫殿のごとし。

此は彼等には金に泥るべくもなき大功德。此の歩馬は駒こんでいこまとなり、此の御との人は殿しゃのく車と匿なりとなりて、仏思になり給ふべしとを召ぼしめすべし。抑そもそもすぎし事なれども、あまり尊にたうとくうれしき事なれば申す。

昔は波羅奈国らにな摩訶羅王こくと申す大王まをはしき。彼の大王かに二らの太子ああり。所謂ぜん善友太子・悪友太子うなり。善友太子あの如意宝珠くを持ちてまをかはせしかば、此らをとらむがために、をとの悪友太子あは兄弟の善友太子あの眼めをぬき給ひき。昔昔の大王は今のじょうぼんのう浄飯王、善友太子は今のだ釈迦だ仏、悪友太子は今のたい提婆だ達多た此なり。兄弟なれども、たからをあらそいて、世々生々にかたきとなりて、一人は仏となり、一人は無間地獄にあり。此は過去の事、他国の事なり。我が朝には一院・さぬきの院は兄弟なりしかども位をあらそいて、ついにかたきなり給ひて、今に地獄にやをはすらむ。当眼世当めにあたりて、此の代のあやをきも兄弟のあらそいよりをこる。大将殿と申せし賢人も、九郎判官等の舎弟等をほろぼし給ひて、かへりて我が子ども皆所従等に失はれ給ふは眼前の事ぞかし。

とのばら二人は上下こそありとも、とのだにもよくふかく、心まがり、道理をだにもしらせ給はずば、右衛門右衛門たいふのさかの大夫志殿はいかなる事ありとも、親をやのかんだうゆるべからず。右衛門右衛門大の夫は法華経を信じて仏になるとも、親をやは法華経の行者なる子をかんだうして地獄に墮つべし。とのはあにとをやとをそんずる人になりて、提婆達多がやうにをはすべかりしが、未代なれども、かしこき上、欲なき身と生まれて三人ともに仏になり給ひ、父ちかた、母はかたのるいをもすくい給ふ人となり候ぬ。又との御子息等もすへの代はさかうべしとをぼしめせ。此の事は一代聖教をも引きて百千まいにかくとも、つくべしとはをもわねども、やせやまいと申し、身もくるしく候へば、事々申さず。あわれあわれ、いつ見かげ参ざんに入て申し候はん。又むかいまいらせ候ひぬれば、あまりのうれしさに、語かたられ候はず候へばあらあら申す。よろづは心にすいしはからせ給へ。女房の御事同じくよろこぶと申させ給へ。恐々謹言。